

生まれた死生観 背中に近づくことが情熱の源に



佐藤 光紀氏

株式会社セプテーニ・ホールディングス 代表取締役

1975年 東京都生まれ。1997年4月株式会社セプテーニ・ホールディングスに新卒で入社。1999年 新規事業責任者としてインターネット広告事業を立ち上げ、同社を国内トップクラスのデジタルマーケティング企業に育てる。2006年10月 持株会社体制移行に伴い、事業会社である株式会社セプテーニの代表取締役社長に就任。2009年12月 セプテーニ・ホールディングス代表取締役（現任）社長に就任。2013年 新規事業としてマンガコンテンツ事業を立ち上げ、マンガアプリ「GANMA!」を国内有数のマンガアプリに成長させる。また、GANMA!の初代編集長として、数多くのヒット作品づくりを手がける。2017年1月 委任型執行役員制度の導入に伴い、グループ社長執行役員に就任（現任）。

身体が弱く制限のある生活を強いられた少年の頃
憧れた数々の偉人たちが成し遂げた

社会的インパクトに影響を受け

自分の生きかたを決め、音楽の道を目指す

幼少期の体験から 憧れた偉人たちの

インターネットに出会い、事業をつくり、コトを成す方向に切り替える
新規事業を立ち上げ、98%の辛さを2%の楽しさで癒しながら走り続け
上場後に訪れた組織崩壊の危機も乗り越えて
人が集まる場をつくり、事業を通じて与えられた使命を果たしていく…



寺田 親弘氏

Sansan株式会社 代表取締役社長
神山まるごと高専 理事長

1976年 東京生まれ。起業家の父親の影響で小学生の頃には起業を志していた。
1999年慶應義塾大学環境情報学部卒業。大学卒業後、三井物産株式会社に入社。
米国・シリコンバレーでのベンチャー企業の日本向けビジネス展開支援や、子
会社の経営管理等に従事。三井物産退社後、2007年に Sansan 株式会社を創業
し、営業 DX サービス「Sansan」をはじめとした「働き方を変える DX サービス」
を提供。2021年に東証一部上場。2023年開校の神山まるごと高専 理事長就任。

お釈迦様の本に 影響を受け、 偉人への道を志す

寺田 今日はセプテーニ・ホールディングスの佐藤光紀さんにお話を伺います。どうぞ宜しくお願いします。

佐藤 宜しくお願いします。

寺田 佐藤さんとは、Sansanの創業期に、共通の知人で投資家のベンチャーキャピタリストの赤浦徹さんにご紹介いただきました。赤浦さんはインキュベイトファンドというベンチャーファンドを創業され、Sansanの創業時から支援していただいていた役員として関わってもらっています。

佐藤 赤浦さんが、「最近投資したところで、すごい会社がある」と熱心にお話されていました。当時、寺田さんはリンクナレッジというサービス名で、名刺の読み取りサービスを展開しておられるということで、お引き合わせいただきました。

寺田 社名が「二三」という漢字表記の頃ですね。

佐藤 赤浦さんから「こういう事業だ」



佐藤光紀氏

という説明を受けて、お会いしたその場で当時の名刺管理サービスをセプテーニに導入したところからのお付き合いです。

寺田 2009年だったと思います。営業に伺って、即導入いただきました。懐かしいです。

佐藤 今回、神山まるごと高専のプロジェクトでも一緒にさせていただいています。初めてお会いして以来、時々食事に行ったり、事業の局面がちよっと変わる時などに、「相談」と言うより「壁

打ち」のような感じで、寺田さんの頭の中にある考えやビジョンについて「こんな事をしようと思っているのですが、どう思います?」みたいなやりとりをしていました。

寺田 佐藤さんとはほぼ同年代、経営者としては先輩で、私が創業した頃には既にスター経営者のような感じでしたが、フラットな感じで頼りやすく、程良い距離感でした。

佐藤 寺田さんと最初にお会いした時は、割と飄々とした印象でした。大企業を辞めてスタートアップを創業さ

れる方というのはあまり多くない時期で、そういう経歴も珍しいなと思います。信念を内に秘めておられ、事業に対する想いや、事業を通じて生み出したい影響のスケールが大きく、構想力に加え未来を創る力がとてもあるなと感じていました。「目の前の事でちよっと成功したい」というより、もっと長期的な目線で大きな事業を創りたい、という意志を持っていらっしゃる印象でしたね。

寺田 佐藤さんは、既に大成功されている経営者でしたので緊張感を持ってお会いしたのですが、第一印象は、「カッコいいな」でした。見た目云々もそうですが、空気感とか間の取り方やフラットな感じなど、当時多少なりともいろいろな人を見るようになっていましたが「こんな人もいるのか」みたいな驚きがありました。お付き合いが始まって改めてお伺いします。佐藤さんの幼少期はどんな少年でしたか?

佐藤 小学生の頃までは身体が弱くて病院にいた期間も長く、制限のある生活をしていました。友達と外で遊んだり運動したりする活発な時間より、内向的に自分の内側に何かを問いかけて、深く深く内部に潜っていくような

考え方をしていたというか、それしかする事がなかったで、ひとりで思考を深めていくのが好きな少年時代でした。大げさに言うけど死生観とも言える、「どう生きたいか」といった生き方に対する最初の目覚め・動機ができたのが小学校5年生の10歳くらいの時です。我ながら早熟だなあとありますが、はつきり覚えています。当時言語化はできていませんでしたが、それまで講がかかっていた所に「こうやって生きていこう」と霧が晴れたような感覚がありました。ビジョンは頭の中に見えていたので、それを実現していくことを人生の指針にしようと思っていました。

寺田 「自分が生きていけるかどうか」のシビアさだったのですか？

佐藤 今ではすっかり元氣ですが、当時の子ども心としては、「こんなに辛い思いをして生きていくのは中々しんどいな」と感じてはいました。

寺田 そうだったんですね。佐藤さんは過去にミュージシャンを目指していたというお話が印象的ですが、どうしてミュージシャンになろうと思ったのでしょうか。

佐藤 内省を繰り返していた時期、お

およそ6、7歳の頃から先ほど話した10歳くらいまでの間、歴史上影響が大きい事を成し遂げた人、所謂「偉人」とはどういう人だろう、とよく考えていました。最初に母親から渡された本はガンジーもあれば、キリストも、お釈迦様もある中で、お釈迦様の本に一番影響を受けて「これは偉業だ」と感じました。それこそヘレン・ケラーやフーブル、野口英世、エジソンなど、あらゆる偉人の本を読み漁った結果、自分にとってはお釈迦様が与えた社会的インパクトがもっとも大きいと思っ

たのです。ひとりの人間の個体としては、どこかで寿命が尽きるわけですが、どうすればお釈迦様のように永続的で大きな社会的インパクトを与えられる人になれるのかなあと考えていました。音楽を選んだのは、結果的に音楽しかなかったからという感じですが。当時は文章を書いたり、絵を描いたり、映像を撮ってみたり…、高校生の時までは全部試しましたが、文章は自分の文章があまり好きではなかったし、絵も絵心があるとは思えなくて。一方、後に事業を起こし、編集



寺田親弘氏

者としてマンガをつくることに関わるようになり、自分自身ビックリするのですが…。(笑)。映画は現在ではiPhone等でも撮れますが、当時は機材が高くて学生では続けられませんでした。音楽は楽器さえあればできるので続けられたし、自分のパフォーマンスにある程度納得できたので、選択として音楽にしたということです。15歳から24歳迄ずっと音楽をメインにやっていました。大学では法学部に進み、法律家の道も考えましたが、自分にはそんなに真面目な生き方はできないと判ったのと、当時の自分がクリエイティブイを発揮する場所として音楽の方がゼロから作れるし自分に合っていると思ったのです。

寺田 お釈迦様から宗教の方に行くことはなかったのですか？

佐藤 こんなことを話していて何なのですが、自分は全くの無宗教で、どちらかというと「偉業」として解釈したので、比較対象が経営者や科学者、哲学者で、並列の存在として宗教家があるのだと捉えています。

寺田 バリエーションのひとつということですか。「すごいイノベーションした人」としてのお釈迦様なのですね。

デジタルの産業革命と

宇多田ヒカルのデビューで

音楽からビジネスに転身

寺田 最終的に音楽をやめてビジネスに切り替えたのは何か理由があったのですか？

佐藤 曲を作り様々なジャンルの音楽をし、いろいろなバンドやグループも24歳（就職して2年目）まで続けましたが、長い人生を考えると、これをずっと続けたいかというクエスチョンが出てきたのが1998年、1999年頃です。当時はまだCDが何百万枚も売れている時代でしたが、それまですごく高い機材を使わないと作曲できなかったのが、Macひとつで出来てしまつとか、物理的なCDではなくインターネット上からダウンロードで聴けるなど、産業へのディスラプトが起き始めていました。そのため、この先ミュージシャンとしての自分が仮に活躍できたとしても、それは自分にとっての偉業にならないのではないかと思いはじめました。音楽は宗教と結びつきが強く、活版印刷がない時代に、羊皮紙に書いて人から人に伝えるのは情

報流通コストが高いので、思想を人から人に効率よく伝播させる有効な手段として音楽が用いられてきました。そういう意味では賛美歌もお経もミュージックなのです。その後産業革命で活版印刷が生まれて簡単にプリントできるようにになって、次には通信で情報が伝わるようになっていったので、音楽の役割は印刷すらなかった時がピークだったと感じていました。

寺田 そこまで考えていたのですね。

佐藤 そう考えモヤモヤしている時に起こったのがデジタルの産業革命です。インターネットが大きな社会的インパクトを生むと確信しました。また、それと同時に衝撃が走ったのが、実は宇多田ヒカルさんのデビューでした。

寺田 彼女のデビューはインパクトが大きかったですね。

佐藤 1998年の冬、当時15歳の彼女の『Automatic』という曲を聴いて衝撃を受けました。変な話ですが、正直「負けた」と。それまで、先輩のミュージシャンに対して「すごいな」「勝てない」と思ったことは何度もありましたが、とはいえ歳上だし、生きている時間が違うので同じ時間内で超えればいいと思っていました。で

も、23、24歳の自分に対して15歳の宇多田ヒカルさんのデビューは、本当に「電撃が走る」というくらいショックを受けて打ちのめされました。その衝撃で音楽やめようと思いがつきま

した。それを境に、「インターネットを通じてプロダクトやサービス、事業をつくって、偉業を成し遂げよう、コトを成そうという方向に100%いく」と切り替えました。ですから、社長や起業家になりたいと思つたのではなく、「音楽か、インターネットで起業か」という二択で選んだだけで、結局はバンドを組んで曲を作ってライブをして、CDや音楽を販売して多くの

人に思想を乗せた情報を伝えることによって、偉業を成し遂げることと何ら変わりません。自分の中である程度抽象度を高めて「同じものだ」という風に理解しているのです。就職した最初の2年間だけは会社員として仕事していたように思いますが、事業を立ち上げた24歳以降は、自分の中では仕事をしているのか、遊んでいるのかの線引きが曖昧なままです。ただ、「業」としてはサイエンスによって再現性を

出してスケールさせていく。つまり、教会で歌うとかお経を唱えるなど、CD

やレコードにして流布する基盤のプラットフォームを創る事と、その上のコンテンツを作る事の両方をやりたいとは思っていました。その方が「偉業」になるだろう、と。

寺田 コンテンツとプラットフォームを両方作りたいと思っていたのですね。

佐藤 当時からそう決めていました。それが出来るなら手段として、起業するか、会社を経営しなければいけないなら社長をする、別にしなくていいならしないでもいいと。どちらかという手段は何でもよくて、「業」が大きい方が良かったのです。

寺田 会社という概念はないですよ。ね。

佐藤 でも、そういう人の方がより偉大な「業」を成し遂げています。ジョン・レノンも、別に社長をやってないですが、インパクトでいうと、余程の起業家より大きいインパクトを出していますから、尊敬する人はどちらかというと社長ではない人の方が多いからかもしれません。

寺田 そういうきっかけでビジネスに入つていつ、今に繋がるわけですが、とはいえ事業を立ち上げてからの24年

の間には、ビジネスを「本当に遊んでいる感覚で」と言えないような辛い事や悔しい思いをした場面もあったのではないですか。

佐藤 24歳で始めて今年48歳、丁度人生の半分ですね。

寺田 それだけやっていたら、いろいろあるでしょう。そういう時にまた、違う芽生えとかはありませんでしたか？

佐藤 これは寺田さんも同じだと思えますが、正直むちゃくちゃ大変な事ばかりでした。起業して「楽しい」と感じたことなど殆どなく、98%ぐらいが辛いことで、2%ぐらいたまに楽しいことがあり、その2%で98%の辛さがほぼ癒されるような……。だから辛い時間の方が長いのですが、それでも幼少の頃よりは辛い。生きる、死ぬに向き合った経験があると、その後の大変な事もそれほど大変に感じないのかもしれない。なので、心が折れるようなことは1回もありませんね。

寺田 1回もないのですか。

佐藤 最悪、死ななければいい。死なずに生きていれば自分の思想は多くの人に伝えられますから。それにいつてもギター一本からやり直せるというよ

うな、ある意味の自己肯定感が自分の中にあるように思います。起業して2年間は殆ど休まず寝ずにやっていて、平日は1日20時間近く働いて、会議は週末の土曜か日曜に行っていたので、当時は本当に週120時間以上労働というスーパーブラックな働き方をしていました。

寺田 月間500時間ですか。その時も辛かったですか？

佐藤 その時は創業期の高揚で、ある意味身体は蝕まれているけど気持ちは麻痺し、ずっと「ハイ」の状態で走り続けていましたね。そのように働いていたら、2年半で身体が壊れてしまいました。朝起きたら声が出ない、かすれてしゃべれなくなってしまうって。

寺田 ええ……!!? そこでもまた身体と向き合うことになったのですか？

佐藤 いつ治るのだろうと思いつつながら、自分が事業責任者なのでそれでも仕事は続けていました。

寺田 やるしかない。

佐藤 声は出ないけれどメールで何とかこなしていました。2週間程そのような生活をした後、徐々に声が出るようになってホッとしましたが、ギリギリまで追い込まれて身体がボロボロに

なった経験から学習して、それまでと真逆の生活をするようになりました。遅くまで会社にいない、外に出るようになる、直接的な業務以外の時間を増やすなど、社員にも今までの働き方を切り替えようと言いはじめました。いろいろと葛藤はありましたが、働き方も自分の身体との向き合い方も変わって、そこからすごく身体を鍛えるようになりました。それが28歳頃ですね。

寺田 その頃も代表取締役でしたか？

佐藤 その時は役員で、社長になったのは30歳過ぎです。私が入社した当時、セブテーニグループは全く別の事業をされていて、2000年に私が始めた新規事業が現在の軸事業になっているので、最初の何年かはインターネット事業の責任者をやって、持株会社体制へ移行した後、2009年からはグループの代表をしています。

寺田 上場はいつでしたか？

佐藤 2001年です。インターネット事業を始めた1年後に上場しました。

寺田 24年間をフェーズに分けるとしたら、最初の2年がフェーズ1と思って聴いていたのですが、塊として自分の中で振り返った中で、フェーズ1と

か2とか、何かありますか？

佐藤 組織作りにおいて、いくつかフェーズはありましたね。事業をスケールさせていくにあたって、社員約100人、売上100億円程度までは、完全な文鎮型の組織で、自分もプレイヤーであり、全ての物事を決めるというリーダースhipの型でした。事業を伸ばすにはそれが一番効率のいい方法でした。でもそれによって身体はボロボロになり、社員も疲弊する、事業も伸び悩むという最初の組織崩壊の危機が事業を始めて4年目ぐらいの頃に訪れました。その時は、まさに自分の考え方や働き方を180度変えた時期でした。次のフェーズとしては300人、300億円程度の規模の壁でした。組織をつくるという意味で、自分以外のマネジメント層の人達に会社をリードしてもらえないようにしたいけれど、それが出来ないという状態になり、再び組織崩壊の危機がありました。結局自分が急ぎ過ぎて、事業が伸びるスピードよりも速く事業を広げようとしてしまったので、社内がついてこれなかったのでしょう。ベンチャー企業の経営ではよくある話だと思いますが、その2回目の組織崩壊の

危機を超えてからは、それほど人の面で苦勞しなくなりましたね

寺田 フェーズを分けるとしたら、事業立ち上げから1回目の組織崩壊まで、2回目の組織崩壊まで、それ以降という感じですね。

佐藤 そうですね。その後2013年に、新規事業として今のマンガ領域の事業を立ち上げたのですが、そのタイミングでは人が育ってきていましたし、5年程かけて自分が立ち上げた事業を別の人に引き継いでいくプロセスを想定しながらサクセッションプランを進めたので、あまり混乱はしませんでしたね。

寺田 起業から24年、「人」をつくっている感覚と「事業」をつくっている感覚、どちらの方が大きいですか？

佐藤 時間的には人づくりの時間の方がはるかに長いと思います。現在当社はグループ会社30社以上から構成されていますが、私がゼロから立ち上げたデジタルマーケティング事業とマンガ事業以外の他の社員が立ち上げてくれています。時間軸的には24年間の中で多分5、6年はゼロから事業をつくっていて、それ以外は人や文化、組織をつくっている感覚です。

仕事と遊びは渾然一体

人生の使命に立ち返り、

ひたすらそれを

目指すのが幸せ

寺田 佐藤さんとは、必ずしもべつたりではないゆるやかな壁打ちをしていただくという距離感ですが、ここ1年程はグッと接点を持たせていただいています。「神山まるごと高専」に出資していたとき、学費の無償化並びにスカラーシップパートナーとして、長くお付き合いいただくことになりました。「偉業を成したい」というビジョンの中で、高専はどんなビジネスに見えるのですか？

佐藤 まず、自分が事業を通じてコトを成したいと思っても、向いているか否かという適性もあります。したいけれど出来ない事というのは現実的に割り切らなければいけないですよ。自分以外の誰かにビジョンを託すという意味では、教育とはまさにそういう分野です。寺田さんが神山に「学校をつくる」となった時に、自分の中でピンとききました。少し前にSansanがサテライトオフィスを徳島の神山町に

設けられた時に、私もあるツアーに行してオフィスに伺い、そこで神山の皆様とも交流をさせていたいですごく気のいい場所だなと感じていました。つまり、人と場所がいいということを体験していたのです。また、Sansan創業時に寺田さんと最初にお会いしたときに遡ると、寺田さんはまさに長期的に事業を創って、大きなコトを構想する力と実現していく力をお持ちなのだと感じました。それをもう少し言語化すると、アートとサイエンスの両方をお持ちでいらつしやるということです。例えば、Sansanが成長していく過程で、テレビCMなどを活用したセールスプロモーションがすごく上手で、顧客や市場を創造することができるマーケティング能力に秀でていらつしやいますよね。

寺田 まさにクリエイティブですね。

佐藤 それはアートとサイエンス、クリエイティブティとテクノロジーを掛け合わせないと出来ません。Sansanの成長の過程では、まさにアートとサイエンスを非常にいいバランスで組み合わせ、それをプロダクトや事業、組織や経営に落とし込んでこれたのでしょ。その創業期のインスピ

レーションとその後の神山の体験を繋ぎ合わせると、今回の新しい学校をつくるという取り組みは大きな社会的インパクトを生むだろうし、真の意味でこれは偉業になるだろうと思いましたが、しかし自分がそれをするのかというとき、少なくとも自分が創っている事業の延長線上で最優先にはなりません。最優先のアジェンダではない以上、「この人だ」という人に託し、協力して偉業を成し遂げ、その過程でもちろん自分達も当事者として関わって汗をかき、その成果に多少なりとも貢献するということ、いわゆる「支援者」としての立場になった方がいいだろうと考えました。

寺田 嬉しいです。少しだけ未来の話をお伺いしたいのですが、佐藤さんはほぼ同年代で、「100歳まで元氣」とか言っても、会社としての「次世代へ」とか個人としての次の形勢とか、様々な事を考える年齢かと思いますが、何かお持ちの、現段階でのビューというか、ご自身の人生や今経営しておられるセブテーニグループをどう重ねてどう離していくのか、ということに対しての距離感などはどんな感じでしょうか。



対談を終えて

佐藤 自分が直接指揮を執る期間に企業が一番大きくなるのも良いですが、バトンタッチした後も成長を続ける事業や企業の方がより社会的に価値があるし、つくった側としても嬉しい。先程お話したお釈迦様のようにになりたいと思った動機と同じで、「偉業」とは

そういうものだろう、と。自分の中の「偉業」の定義は、サクセションが前提です。
寺田 引退願望はないのですか？
佐藤 セブテーニグループの経営とは別に、事業づくりから離れるという意味では、引退願望はないですね。何故

なら引退する程辛い事をしていないので……。何かから解放されたいという気持ちになつたことがあります。仕事と遊びが混ざって私の「ライフ」となっているので、特段、ライフから解放されたいとは思いません。
寺田 「燃え尽きる」というのはあると思いますか？
佐藤 分かりませんが、いつかは来るでしょうが、自分の中のクリエイティブティを磨き

続けるのは、ある意味、燃え尽きないようにしているからかもしれません。
寺田 スポーツもなさっていますね。
佐藤 運動は好きで、最近はキックボクシングや柔術など、格闘技にハマっています。自分のフィジカルの限界を知りたいというのと、生き物として偉大な事を成し遂げるには、そしてクリエイティブティを磨き続けるためには、フィジカル面はある程度必要な前提条件だと思っています。
寺田 動きながら又燃やしていく……という感じですね。その根底にあるのは何ですか？
佐藤 やはり10歳の時に描いた死生観だと思っています。私はお釈迦様が成し遂げたような偉大な事をしなくて生きています。人生の使命、ミッションですよね。どうしても最後にそこに立ち返って、自分の持てる時間の中でひたすらそれを目指しているのが幸せなんだと思います。
寺田 クリエイティブにお仕事をされて、身体のケアもされていて、「あゝ、幸せだ」と思う瞬間とは、どんな時ですか？
佐藤 好きな人と一緒に時間を過ごして、美味しいものを食べている時ですね！
寺田 一番ハッピーな時間ですね。最後に音楽をはっきり「やめた」という概念はありますか？
佐藤 それは「区切りをつけた」という言い方が正しいかもしれませんが。またいつか始めるかもしれません。当時は新しく立ち上げるインターネットの事業の成功に100%フォーカスするため、つまり、自分を追い込むためのマインドセットです。
寺田 とりあえず一旦停止、みたいなことですね。
佐藤 音楽という手段ではないですが、現に今、マンガやアニメの事業では作品を作ってそれを世界中に流通させているわけですから、結局は同じ事をしていくような気もします。当時は自分に絵心がないので諦めていたんですが、マンガやアニメの場合は作家さんと一緒に作品をつくっていくため、ある意味10代の頃の夢が叶ったとも言えますね！（笑）
寺田 なるほど。今日はいろんなお話を伺えてとても楽しかったです。どうもありがとうございました。
佐藤 こちらこそありがとうございました。

なら引退する程辛い事をしていないので……。何かから解放されたいという気持ちになつたことがあります。仕事と遊びが混ざって私の「ライフ」となっているので、特段、ライフから解放されたいとは思いません。
寺田 「燃え尽きる」というのはあると思いますか？
佐藤 分かりませんが、いつかは来るでしょうが、自分の中のクリエイティブティを磨き

続けるのは、ある意味、燃え尽きないようにしているからかもしれません。
寺田 スポーツもなさっていますね。
佐藤 運動は好きで、最近はキックボクシングや柔術など、格闘技にハマっています。自分のフィジカルの限界を知りたいというのと、生き物として偉大な事を成し遂げるには、そしてクリエイティブティを磨き続けるためには、フィジカル面はある程度必要な前提条件だと思っています。
寺田 動きながら又燃やしていく……という感じですね。その根底にあるのは何ですか？
佐藤 やはり10歳の時に描いた死生観だと思っています。私はお釈迦様が成し遂げたような偉大な事をしなくて生きています。人生の使命、ミッションですよね。どうしても最後にそこに立ち返って、自分の持てる時間の中でひたすらそれを目指しているのが幸せなんだと思います。
寺田 クリエイティブにお仕事をされて、身体のケアもされていて、「あゝ、幸せだ」と思う瞬間とは、どんな時ですか？
佐藤 好きな人と一緒に時間を過ごして、美味しいものを食べている時ですね！

続けるのは、ある意味、燃え尽きないようにしているからかもしれません。
寺田 スポーツもなさっていますね。
佐藤 運動は好きで、最近はキックボクシングや柔術など、格闘技にハマっています。自分のフィジカルの限界を知りたいというのと、生き物として偉大な事を成し遂げるには、そしてクリエイティブティを磨き続けるためには、フィジカル面はある程度必要な前提条件だと思っています。
寺田 動きながら又燃やしていく……という感じですね。その根底にあるのは何ですか？
佐藤 やはり10歳の時に描いた死生観だと思っています。私はお釈迦様が成し遂げたような偉大な事をしなくて生きています。人生の使命、ミッションですよね。どうしても最後にそこに立ち返って、自分の持てる時間の中でひたすらそれを目指しているのが幸せなんだと思います。
寺田 クリエイティブにお仕事をされて、身体のケアもされていて、「あゝ、幸せだ」と思う瞬間とは、どんな時ですか？
佐藤 好きな人と一緒に時間を過ごして、美味しいものを食べている時ですね！
寺田 一番ハッピーな時間ですね。最後に音楽をはっきり「やめた」という概念はありますか？
佐藤 それは「区切りをつけた」という言い方が正しいかもしれませんが。またいつか始めるかもしれません。当時は新しく立ち上げるインターネットの事業の成功に100%フォーカスするため、つまり、自分を追い込むためのマインドセットです。
寺田 とりあえず一旦停止、みたいなことですね。
佐藤 音楽という手段ではないですが、現に今、マンガやアニメの事業では作品を作ってそれを世界中に流通させているわけですから、結局は同じ事をしていくような気もします。当時は自分に絵心がないので諦めていたんですが、マンガやアニメの場合は作家さんと一緒に作品をつくっていくため、ある意味10代の頃の夢が叶ったとも言えますね！（笑）
寺田 なるほど。今日はいろんなお話を伺えてとても楽しかったです。どうもありがとうございました。
佐藤 こちらこそありがとうございました。